

V. J. ベニット

ヘルマン・ヘッセの作品における女性の役割(II)

内尾一美
渡辺信生 訳

クライン と ワーグナー

可能ななんらかの手段によって、ヘッセを破壊せんとする内部からの力に対して、ヘッセが納めた明らかな勝利についてのすばらしい芸術的表現は、極めて短期間しか続かないことが判明した。『デーミアン』における無意識の住人たちとの和解をもたらすのに必要なプロセスと諸段階の、極めて徹底した暴露は、著者を苦しめている状況を一時的に和らげたにすぎなかった。『デーミアン』を完成したときから3年もたたないうちに、ヘッセはひどいぶり返しを経験したように思われる。それは彼が恐らく続けることのできる唯一の道は、文学の仕事の中に生き、そしてまたその為生きることでであると確信した程であった。

『デーミアン』に於て、シンクレアが時間の大部分を、自らの夢のイメージの解明に没頭したのに対して、クラインは神秘的というよりはむしろ具体的、現実的な性格の持主たちに、より多く関わりを持っているように思われる。

『デーミアン』は、現実的な尤もらしい状況から、非現実的で極めて象徴的、空想的な現象への進行を描いているように思われた。それが自己認識のプロセスを芸術的に物語っている小説であるという事実から見れば、少しも驚くにあたらないことである。『クラインとワーグナー』には漠然たる要素、夢のような特質が含まれているが、この作品の大部分は登場人物たちのリアリスティックな描写にあてられている。丁度、神秘的な方向性を持ったラウシャーの時期が、著者の葛藤を恒久的に緩和するには不十分であったのと同様に、彼の中期のこの最初の試みも、ほんの名ばかりの成功を納めたにすぎなかった。

『クラインとワーグナー』は、アルプスを越えて南国へ逃げる逃走、脱出の短編小説である。明らかに自伝的小説である。ボールビーは、この作品は、「恐

らく現代ドイツ文学全体の中で、最も無慈悲に直接的で情け容赦のない自己暴露の作品の一つであり、後年の『危機』の詩や『荒野の狼』と同じ素材からなるものである⁹⁷⁾と述べている。モンタニョーラにおける最初の年に書かれたので、この短編は、再び自分のために新たな出発をしようとする、自ら個性化と称しているプロセスによって、必要な内面の平和を作りだそうとする、著者のカタルシス的試みを高度に表現している。それ故我々は、南国での新たな出発を意図して逃れんとしている逃走中のクライン／ヘッセを発見する。クライン／ヘッセが、自分の本性には別の側面があること、そして自分は無意識のそのような内容を心から探求したいのだ、できれば抱きしめたいとさえ望んでいるのだということを、たとえ束の末であるとしても自認するという事実は、個性化の漸進的な諸段階を、更に解明したいとの願望を表わしている。クラインの体験においては、順次に様々な段階を経て、『デーミアン』に見られるような自己認識に到達するというようなことはない。この短編の大部分は、彼のアニメ像、デリケートな夫婦間の問題、究極的には彼自身の運命に取り組んでいる。

自由と新しい人生を目指して汽車で南国へ向かいながら、クラインは見たばかりの夢の出来事と状況を熟考する。その夢の中に、息がつまるほどの大きな力と影響を彼に及ぼしてきた知人たちの一人がいたという明確な印象がある。それは彼の上役だったのか？それとも父親だったのか？その支配によって彼をまさに窒息させようとした人物を、彼はどんなに軽蔑したことだろう。

「あれは誰だったろう？自分が尊敬し、自分の生活への支配を許し、それを耐え忍び、しかもひそかに憎んでいて、その脇腹をけとばしてやったその人物は？もしや父親では？それとも上役の一人だったろうか？それとも—それともあれはやはり—？・・・今や彼には分った！今や彼は分り、感じ、味わい始めた。なぜこの急行列車に乗っているのか。なぜもうクラインという名前ではないのか。なぜお金を横領し、偽造したのかを。やっとな、やっとな分ったのだ！その通りだった。もう自分に隠しておくのは無意味だった。これは自分の妻のためにのみ起ったことだった。やっとな分ったのはどんなによいことだろう！」⁹⁸⁾

現在の心境を生みだした出来事や状況を思いだそうとして、自分の人生を振り返って見ると、クラインの心の目に既婚者としての長い人生が見えてくる。「この人生の道のりは、一人の男が埃にまみれてただ一人、重い荷物を引きずって行く長い、飽き飽きする、荒涼とした通りのように思われた。その後方のどこかに、埃のかなたの眼に見えない所に、光り輝く丘と、緑の風にそよぐ青春の梢が消えてしまったのを彼は知っていた。」⁹⁹⁾

ある見知らぬ力が、彼の心の最も激しい二つの欲望を、彼が実現するのを望んでいたのである。即ち、「とうの昔に忘れていた南国への憧れと、ひそかな、まだ一度もはっきりと実現させたことのない、結婚の苦役と汚辱からの脱走と自由への欲求」¹⁰⁰⁾の実現を。クラインもまた何か他のもの、最も重要なもの、つまり彼自身とは別のもののために、いつも多忙であったという結論に到達する。家庭では平和と調和を維持しなければならなかったし、子どもたちの勉強を手伝ったり、彼らが病気になるとその世話をしなければならなかった。自分のために本当に望んでいることよりも、お金や昇進のことで一層くよくよするようにいつも強いられてきた。これらのことはみな中産階級の市民の、夫兼父親の大きな神聖な義務であった。そして彼は、「その義務の影の中で生き、それに犠牲を捧げ、そこから生活の肯定と意義を得ていたのであった。」¹⁰¹⁾こうした反逆の感情を、心の中で育つがままにしておいたのは、彼一人の責任であった。なぜなら、

「彼自身の心の中で運命が、犯罪も反逆も、神聖な義務の放棄も、宇宙への跳躍も、妻への憎悪も、逃走や孤独、恐らくは自殺も大きくなったのだから。…だが彼、犯罪者クラインは、何事にも責任をとることはできなかった。せいぜい妻に責任をとらせるぐらいのものだったろう。そうだ、彼女こそ引きだして責任をとらせねばならなかった。いつか弁明を求められたら、彼女を名指したらよいのだ。」¹⁰²⁾

この点に到るまでのクライン／ヘッセの自己の立場の正当化は、自らの思想と行動に全責任をとる用意のある真に分別のある個人には、余りふさわしいものとはいえない。それにも抱らず、それは西洋世界の中産階級の「神聖な柱」に向けられた、かなり痛烈な攻撃である。明らかにヘッセは、『ロスハルデ』の場合のように芸術家の苦境を描いているのではなく、ヘッセと同じように特定の社会内部で成長し、暮している個人に強いられる窮屈さと束縛感を攻撃しているように思われる。グンデルトーヘッセ家に備わった敬虔主義の教育と子供の育て方には、理論の上では自由はあると公言されていたけれども、そのような自由は理論以外には存在しなかった。ヘッセがこの特定の問題に対して、このような立場をとっていることは全く当り前のことである。なぜなら、彼はさまざまな機会に、特にオーソドックスな態度や反応が、例えば、夫と父に要求される場合に、自分の能力と傾向について懸念を認めているからである。結婚生活をうまくやって行く能力についての彼の真剣な疑念と共に、女性に対する彼の態度を考慮すると、クラインの妻が、むりやりおしつけられる中産階級の

価値に対する、ヘッセ／クラインの激しい非難の矢面に立たされているのは驚ろくにあたらぬ。

自己分析を続けて、クライン／ヘッセは、少くともある程度は無意識の影の像を認識し、意味を明らかにし始めることができる所まで前進した。彼はペルソナの側面、個人によって投影された外的な印象について議論するが、賢明にも他の側面、即ち、影の原型をも所有していることを認める。

「彼、クライン氏は誠実な男であった。その誠実さの影に、不潔なものや恥ばかりを隠していたのだ！ 実際、誠実であろうとして、ひそかな思いを自分に対してさえどれ程隠しておかねばならなかったことだろう！ 路上の可愛い娘にどれ程眼差しを投げたことだろう！ 夕方役所から妻のいる家に帰るときに出会った恋人同志をどれ程ねたましく思ったことだろう！」¹⁰³⁾

クラインが、自分の心の構造には、表面に見つかるものより多くのものがあるということを、認めさえしているという事実は、確かに正しい方向での極めて重要な一歩である。なぜなら、人は多くの側面が個人の性質を構成しているということを認め承認してから、始めて両極性間の必要なバランスを求めて努力することができるからである。

ユング的な意味に於ける個性化をめざして、かなりの進歩をとげたという事実にも抱らず、しばしばクラインは、影の側面が無意識から浮び上ってくるのを認めるのに、自分がまだ束縛され妨げられていることに気づかされる。非常に魅力的で官能的な若い女性が、彼の腰かけているベンチのそばを通りすぎるときの彼の反応は、全く不本意のものである。彼女が通りすぎるのを見ることから得られる喜びはすべて、自分の「より良い側面」の制御的影響によって殆んど直ちに否定されると彼は熟考する。なぜなら、その「より良い側面」が、立派な人間であれば、そのような事を思いめぐらしたり、喜んだり、楽しんだりはしないものだと言及するからである。けれども彼の身体は、しばらくの間陽気な気分と興奮とを味ったのである。しかしそれから空想は消滅し、現実と慣習が再び彼の意識を支配した。

「彼女の立派な生き生きした靴、あんなにもしなやかなしっかりした足どり、それにうすい絹の靴下をはいた締った脚が、一瞬彼を捕えてうっとりさせたことはもう忘れていた。彼女の衣ずれの音や髪や、皮膚を思いださせるほのかなところよい匂いは消えていた。軽やかに彼にふれた、性と愛欲の機会の美しくも優しい香気は、投げすてられ踏みにじられていた。その代り多くの思い出がよみがえってきた。こうした若い自信にみちた挑むような女たちを、娼婦であ

ろうと虚栄心の強い社交会の女であろうと、どんなに彼はしばしば見たことであろう！その恥知らずな挑発は、どんなにしばしば彼を憤激させ、その自信にみちた態度はどんなに彼をいらいらさせ、またその冷たい獣のような見せびらかしは、どんなに吐き気を催させたことだろう？ハイキングや町のレストランで、こうした女らしくない、娼婦のような女たちに対する妻の義憤を、彼はどれ程心から分ち合ったことだろう！」¹⁰⁴⁾

クラインは遂に、たしなみや品行方正に向かう彼のこのような態度は、大部分学び覚えた態度であり、自分が心から同意したのではなく、時にははっきり理解したことさえないのに、押しつけられたり強いられたりされた考え方であるという結論に到達する。彼は硬直した一連の価値感を持っている妻を非難する。彼は妻の価値感を自分の行動の尺度にして、自分が常にこの理想からかなりはずれていたのに気づく。しかしながら、妻を非難するのは母をとがめるのに等しい。なぜなら、この時点に於てさえクライン／ヘッセが、母親の影響を完全に断ち切っていたということは、多少疑わしいからである。ヘッセの作品に於ては、妻の影響と母の影響には多分余り大きな違いはないので、殆んど等しい妥当性を以てそのどちらかに起因すると考えられる、さまざまな特質が見いだされる。ついでに言えば、ヘッセが最初の妻を選ぶ際に、母親の死後2年もたたないうちに、「恋人タイプ」の女性ではなくて、9才年上の女性を選んだということは、かなりきわだった偶然の一致である。

公園でのブロンドの美人との出会いを思いだしたときに、クラインは自分が絶えず妻の意志と願望に屈服し、自己を主張することができなかつたし、また思い切って主張してみようとも思わなかつたことを、突然再び嫌悪の念を以て思いだす。彼はかくも僅かなバックボーンしか持ち合せていないことで、本当に自分自身に愛想をつかす。「お前はまたも妻を引き合いにだし、あの女の言葉を是認し、やはりあれの思うままになるのだな！」¹⁰⁵⁾だが、しばらくの間彼は、次のような認識を主張する勇気を奮い起す。

「・・・このような娼婦や社交会の女は、このような優雅さと誘惑と性の匂いは、彼にとって決して不快で感情を害するものではなくて、自分の本性への、ワグナーへの不安から、そして道徳と市民性の束縛と仮装を投げすてさえすれば、自分の内に見つかる獣性や悪魔への不安から、そんな風に思い込んだりしたものであった。」¹⁰⁶⁾

テレジーナに心を奪われていたクラインは、その晩偶然彼女に出会う。彼女は彼を知らないし、彼の方も彼女を知らないけれども、お祭り騒ぎの間に彼ら

はばったり出くわし、彼女は一緒にくるように彼を誘う。この出会いは、この後にくたび重なる出会いの最初のものにすぎないことがやがて明らかになる。

そうした一つの出会いの間に、クラインとテレジーナは、お互い一緒にいるときの満足感や安心感を告白し合う。しかし彼らが、なぜ自分たちがお互いに楽しいのか、理性的に決めようとすると、彼らの調和は消滅しクラインは逃げ出す。

無意識を意識の言葉で理解し、解釈しようと試みるのは不可能であるというのが、ユングの主張である。テレジーナの意義は、クラインには依然として不明である。彼にはそれ以上の理解と背景が必要である。¹⁰⁷⁾彼は自分の内面世界の内容の探求を続ける。なぜなら、すべての個人的ディレンマの解答は、各個人の内部にあると言われているからである。

クラインとテレジーナとの明らかな「偶然」の出会いに対する、一つの考えられる説明は、ユングによって「共時性」と名づけられているあの現象である。この名称は、個人の生活に於て、すべてが意味深長に内面の平和と満足に通じる、実際の出来事や体験に与えられるだけではない。共時性はまた無意識が心(psyche)全体の幸福のために、ある種の支配力と責任を引き受け、それに応じて行動する際のプロセスとも関係があるのである。¹⁰⁸⁾「暗い」世界、つまり、女性の領域から出てきて、テレジーナはクラインを認識の新たなレベルへ案内し、導いて行こうと懸命になっている。彼女自身は、最初は自分がクラインに引きつけられる理由が分らないけれども、それは後で明らかになる。「もしかしたら、彼女は彼の目標であり運命であったのだろうか？ 彼を南国へ駈りたてたある秘密の力が、彼女の方へも駈りたてたのだろうか？ 生まれながらの本能、運命のつながり、生涯の無意識の衝動なのか？ 彼女との出会いは、彼に予定されていたのだろうか？ 運命づけられていたのだろうか？」¹⁰⁹⁾

クラインは、テレジーナとの出会いが、明白な影響を自分に与えたということを感じる。彼はそれまでの自分よりも、より一層世界と和解していると感じる。彼はさまざまな記憶を、それらが意識の表面に浮び上がり始めるがままに受け入れながら、幼年時代までの足跡を回顧する。人々が自分に対して一層親切であり、子供たちも通りをずっとつきまといさえするという事に気づき始める。その晩彼は一夜を過ごすために宿屋に行く。長い間夫から虐待され、無視されていた宿屋の主人の妻は、クラインの腕に抱かれて、優しきや、理解や欲望の実現を見いだす。けれども、宿屋の主人の妻とのこの思いがけない、殆んど

破廉恥な親密さは、・・・彼自身も長いこと無視されてきたのであるが・・・こうした特別の時期には彼は全くの所うまく対処できないのである。彼がこの思いがけない親密さを処理するには、心理的にはまだ充分用意ができていないのは明らかである。その行為の絶頂の直前でさえも、

「・・・彼は幻滅と重苦しさを心に予感していた。彼はあの困ったことが、不安がまた訪れるのを感じた。自分は本性に於て深く愛することはできないし、愛は自分には苦悩と悪しき魅力しかもたらさないという予感と恐怖が冷たく彼の体を裂いた。まだ官能の短かい嵐が静まる前に、不安と疑惑が、自分が奪い征服する代りに、奪われてしまったのだという反感と嘔吐の予感が、彼の魂の中にその悪の眼を開いた。」¹¹⁰⁾

以前にもまして彼は、求愛や男女関係については、自分は依然として少年であり、事実上の初心者のままであると確信する。

性に関して一人前という点では、自分は極めて不十分な男性であるという確認は、特にこの体験の直前のテレジーナとの期待を抱かせる、あのような出会いの後であるだけに、クラインをひどくがっかりさせる。この最後の挫折の結果は、クラインにとって完全な後戻りなのである。「どきどきしながら彼は、あらゆる敵が、不眠、抑うつ、悪夢が待ち伏せしているのを感じた・・・ああ、あれがまたやってきた、罪と不安、悲衷と絶望が！克服したもの、過ぎ去ったものすべてがまたやってきた。救いなどはなかった。」¹¹¹⁾

彼は現実に応じ、因襲の束縛を投げ棄て、これらの性的衝動は自然な衝動であり、そのようなものとして受け入れられ、抱きとられるべきであるということ、認める能力が自分にはないという理由で、きびしく自分を軽蔑しながら、彼は自分にふさわしい死か狂気が彼の生命を奪う機会を、熱烈に望んで絶望し続ける。「それが終るまで、いつか波が反転して、死か狂気が自分を受け入れてくれるまで。ああ、今すぐにでもそうなってくれたなら！」¹¹²⁾このように非常に混乱した精神状態にあって、クラインは自分のディレンマには唯一つの答しかないと感じる。それは次のような答である。

「自分と自分を思いださせるすべてのものを抹消すること、そして神がその中から永久に形象の無常の世界を突きだしている暗い母胎に身を投げ出すこと。そうだ、できることはこれしかない！ワーグナーは去り、死んで、人生の本から抹殺せねばならない・・・しかしこのような状態にある人間にとって、無駄でばかばかしいことではない何かがあるだろうか？ いや、何もありません。頭を鉄の車輪の下に入れて、砕けるのを感じ、進んで奈落の底に沈む方が

やはりmalıdır。』¹¹³⁾

自分の影であるクローマーを同化して、個性化の次の段階へ前進したシンクレアとは違って、クラインはそのワーグナー的側面、つまり自分の影を受け入れるのに、心理的にはかなり用意不十分のまま、この段階に入ったのである。唯一の解決は自己の魂の消滅であるように思われる。

けれども夜明けとともにクラインは、自殺の危機と誘惑に抵抗し得たと感じる。疲れ果てて地面に倒れ、眠りに落ち、夢を見はじめる。彼は劇場と思われる建物の入口に、「ローエングリーン」とか、「ワーグナー」とかの字を読む。中に入って、彼は宿屋の主人の妻に似ているが、また自分の妻にも似ている女に出会う。何かにとりつかれたかのように、クラインはナイフをつかんでその女を突き刺す。その背後から時を移さず、彼が突き刺した女にそっくりの女が現われる。その女は爪を彼の首に食い込ませて締め殺そうとする。クラインはすぐその恐ろしい悪夢から目を覚ます。

この夢の意味をあれこれ考えているうちに、クラインは、あの劇場は「自分の本当の内面のあの見知らぬ国」¹¹⁴⁾を表わしているに違いないと結論する。夢の中で彼は、自分の状況のある種の解明のために、自らの無意識の中に入り込もうと試みたのである。クラインは、「ワーグナー」という名の劇場は、この難問を解く鍵を提供しているのを悟る。彼は、「ワーグナーは以前の官吏フリードリヒ・クラインに於ける一切の抑圧されたもの、底に沈んだもの、不十分なものの集合名詞であったのに気づく。」¹¹⁵⁾

しかし劇場の中で起こった事件の意味は、クラインには依然として疑問のままである。夢の中の女たちは何を表わしているのだろうかかと彼は考える。「恐ろしい仮面を被った女と、かぎ爪を持ったもう一人の女」¹¹⁶⁾のことは説明しようがない。だが彼は、自分が女の腹部にナイフを突き刺した意味を、予感しているような気がする。なぜなら、「彼女の腹へのひと突きが、なおも何かある事を彼に思いさせた。彼はそれを更に見いだすことを望んだ。」¹¹⁷⁾

ゆっくりとクラインは、牧草地やぶどう園を通して町へ帰り、自分の部屋に戻って元気になる。何か食べてから彼は、テレジーナが踊っている「ホール」に行く。彼女のテーブルでクラインは、一緒にカスティリョーネに行く気はないかと彼女に尋ねる。彼女はその夜彼に会うことに同意する。それから好奇心に負けて、彼女は前の晩クラインに何があったのか知ろうとする。率直に彼はあったことを全部彼女に話す。

その夜、カスティリョーネに渡るために借りた素敵なモーターボートに乗っ

て走っている間に、テレジーナの顔と夢の中の女たちの顔が似ていることに彼は突然気がつく。なぜだか実際にはわからないが、「彼はテレジーナの顔と夢に見たあの顔とを比べて見た。」¹¹⁸⁾テレジーナを見つめるにつれて、「テレジーナが夢の女に、いやむしろ、一人は彼にナイフで刺し殺され、一人はかぎ爪を立てて締め殺そうとした二人の夢の女に似ている」¹¹⁹⁾ことを、彼はますます確信するようになる。彼女が賭博をしているのを見ている間に、彼はまたあの夢を心の中で再構成して、自分の見た人間たちに何らかの秩序と意味を与えようと試みる。

「あの夢の二人の女はどうなんだろう？ 妻にも似ていたし、村の宿屋の女にもテレジーナにも似ていた。他の女は知らない、この数年は。あの一人を刺し殺した。その歪んだ腫れ上がった顔がいやでたまらなかったのだ。もう一人が後ろからのしかかってきて締め殺そうとした。どれが一体本物なのか？どれが重要なのか？妻をけがさせたことがあったろうか？それとも妻が私を？テレジーナのために破滅するのだろうか、それとも彼女が私のために？私は女を傷つけずに、また女から傷つけられずに、女を愛することはできないのだろうか？」¹²⁰⁾

ボートに乗って町へ帰るとき、クラインとテレジーナは固く抱擁し合う。彼は彼女の指が戯れに首にふれるのを感じ、すぐ「あの復讐の女が、首に爪を突き立てたときの夢の恐ろしい感情」¹²¹⁾を思いだす。彼はテレジーナが自分の復讐の女神であることが明らかなのではないかと思う。

カスティリオーネから戻って数日後に、テレジーナの公演が激しい雷雨に中断される。クラインは彼女の家まで送って行く。彼女から言われた通りに、彼は自分のホテルへは行かずに、二人は寝室に行き、自分たちの濡れた衣服を脱ぐ。避けられないことが起る。恍惚の数瞬が終ると、彼らは疲れ果てて眠り込む。しかし短かい途切れがちのまどろみの後で、クラインは、宿屋の主人の妻との情事後で感じたのと同じ、不安と疑惑に再び苦しめられて目を覚ます。

「今や苦悩が再び訪れた。またもや、一時間一時間苦痛と不安を胸に抱いて、ただ独り横たわり、無益な苦悩を悩み、無益な考えを考え、無益な心配を心配するように定められていた。彼の眼を覚ました悪夢の中から、重いねっとりした感情、吐き気と恐怖、飽満と自己蔑視が彼の心に残った。」¹²²⁾

この種の耽溺には、クラインにとって長続きする満足は存在しない。この方向の行動は、彼のきびしいディレンマの答にはならない。孤独や死の恐怖から、人々は互いにしがみつき、キスをし合い、抱き合って子供を生む。女を腕に抱きながら男は人生に於て調和を達成し、罪と災難を追い払ったと感じるが、そ

れからいつもそうした陶酔から覚めねばならない。「そして痛む眼で深淵を覗き込み、一切を呪うのだ。」¹²³⁾

フリードリヒ・クラインの態度から二つの結論が引き出されるであろう。第一に、彼は要するに無意識への旅行は、成功と言えるものではなかったことを認めている。因襲が極めて完全に意識を支配してきたので、この特定の時期に無意識の内容を認識し、統合しようと試みても事実上無駄である。たとえクラインがワグナーの世界をあばいたと思いついでいるにしても、彼の以前の教育と行動がはいり込んでくるさまざまな実例は、彼がまだ囚われた状態にあるという事実を証明するものである。第二に、自己実現のプロセスには、性的な、或いは官能的な行動にむやみにたずさわることに以上、限りなく多くのことがある。もしこのような行動の容認が、意識のレベルに於て、より本質的な幾つかの原型を含んでいないとすれば、より高いレベルを熱望しても無駄である。自分の影であるワグナーを、首尾よく受け入れて同化してはいなかったため、クラインもまたアニマに直面しようとするには、かなり危険な状態にある、たとえ意識と無意識との間にあのデリケートなバランスを打ち立てようとしていたのが、彼女であったとしても。

最後の結末は、クラインがマグナ・マターとの理想的な結合を実現していないということである。クラインが最も接近したのは、テレジーナとの情事後で、ナイフを取りに行き、公園での彼らの最初の出会いを考えて、しばらくの間気をそらされ、それから寝室に急いでとって返して、テレジーナがまだ生きていて、安らかに眠っているのを見出すあの瞬間である。本質的には、彼は自らのアニマの投影に、生き続けることを、効力を持ったままにしておくことを許してしまったのである。しかしながら、クラインは彼自身の無意識の内容に、更に深く直面するのに必要な冷静さを持っていない。従って自殺をして、「ボートの内から母の胎内へ、神の腕の中へ身を投げだす」¹²⁴⁾ことで、一切の始源の母である自然との魔術的結合を選ぶ。

クラインが自分の死は無駄でばかっていると悟るのは遅すぎる。

「・・・自分は自殺をしている、子供っぽいことを、成程悪いことではないが、滑稽な、かなりばかげたことをしている。死を望むパトスと死ぬパトスさえも砕けて消滅した。死ぬことはもはや今では必然的なものではなかった。それは望ましく、美しく、歓迎されていることではあったが、もはや必然的なものではなかった。彼が全意欲を以て、一切の欲望を全く断念して、完全に献身しながら、ボートの縁から身を投げたあの閃めく瞬間からは・・・この瞬間

から死ぬことはもはや無意味になった。」¹²⁵⁾

そしてアブラクサス神への崇拜と、その教義への帰依によって表現される両極性の統合を、完全に受け入れるのも遅すぎる。

「従って唯一のわざ、教義、秘密があるだけであった。即ち、身を投げだし、神の意志にさからわず、何物にも、善にも悪にもこだわらないこと。・・・その女なしでは生きられないという女はいなかったし、一緒には暮らせないという女もいなかった。この世のものはすべて、正反対のものと同様に魅惑的なものばかりであった。」¹²⁶⁾

もしこのような元に戻せない状態に身をおく前に、こうしたこと全部を理解していたなら、彼は湖と死の中へ身を投げだす代りに、人生の中へ身を投げだすことができたであろう。

注

- | | | | |
|--|--|--|---------------|
| 96 Boulby, P.130 | 97 Ibid. | 98 H. Hesse:Klein und Wagner, Suhrkamp Verlag, 1958,PP.14—15 | 99 Ibid. P.16 |
| 100 Ibid. P.17 | 101 Ibid. P.25 | 102 Ibid. PP.25—26 | |
| 103 Ibid. P.37 | 104 Ibid. PP.48—49 | 105 Ibid. P.46 | |
| 106 Ibid. PP.48—49 | 107 Jacobi:The Psychology of C.G.Jung, P.115 | | |
| 108 Jung:Man and His Symbols, PP.226—227 | | | |
| 109 Hesse:Klein und Wagner, P.67 | | 110 Ibid. P.105 | |
| 111 Ibid. P.106 | 112 Ibid. P.109 | 113 Ibid. P.111 | |
| 114 Ibid. P.115 | 115 Ibid. | 116 Ibid. | |
| 117 Ibid. | 118 Ibid. P.122 | 119 Ibid. | |
| 120 Ibid. P.127 | 121 Ibid. P.133 | 122 Ibid. P.138 | |
| 123 Ibid. P.142 | 124 Ibid. P.148 | 125 Ibid. | |
| 126 Ibid. P.152 | | | |

本稿は、V・Bennett: The Role Of The Female In The Works Of Hermann Hesse, 1972 の中の<Klein und Wagner>の訳である。本文の英語を内尾一美君が訳し、引用の独語を渡辺信生が訳した。訳文について、同僚の英語科教授即席水雄先生に、貴重な御意見や御指摘をいただいた。心からお礼を申しあげる次第である。